

『富山県教育委員会月報』一九五二年十一月号／富山県教育委員会

富山県総合開発計画の一環としての総合教育計画について

国立教育研究所 矢口 新

只今ご紹介にあずかりました矢口であります。本日の会に、私に富山県の総合開発計画の中における総合教育計画について話をしろという御命令であったのですが、これは幾分筋違いでありまして、もっと適当な方がおられると思うのです。私はただそのお手伝いをしたにすぎないのでありまして、元来この総合教育計画は県の開発審議会という龐大な審議会の中における一部会として、富山大学長の鳥山先生が主査となられまして、金岡教育委員長、近藤教育長という方々から、その他この道の専門家が計画をおたてになつたもので、私はたまたま調査の方の担当を致しましてお手伝いを致したのであります。そういう関係で、比較的具体的なことを知っているからお前話せということ、今日はお話を申しあげるわけでありませう。ですから総合教育計画の本来の実態については、もっと外に専門家がおられると思うのですが、そういう事情でお話し致すわけであります。

計画樹立の基本的立場

さて総合計画をたてます際に一番中心の問題になりましたのは、富山県の場合には産業性という言葉で呼んでいるのでありますが、いわば教育を近代産業社会に適應せしめるということに重点を置いたわけでありませう。産業教育計画ということが最近いろいろ言われているのでありますが、これはいろんな考え方があるようであります。一番狭い考え方では、産業に

対してちよつと言ひ方は悪いのでありますが、教育をその宣伝に使う非常に宣伝性を強調したような産業教育という考え方があるようであります。それからもう少し一歩進んだものとしては、宣伝ということをそれほど極端ではないにしても、産業に奉仕するというような考え方もあるのじやないか。直接に産業のいろいろな要求にあわせて学校の施設とか、内容というものを考えてゆくという考え方もあるようであります。

富山県におきまして、私共が皆さんといろいろ相談した際におけるその辺の考え方に対しては、もっと一般的と申しますか、基本的な考え方をとつたのでありまして、教育全体を近代産業社会へ適應せしめるという考え方で行こうじやないか。何も、総合開発計画、産業開発計画なのであります。そのお先ばかりをかつぐのが教育でないのじやないか。

教育というのはもつと基本的な、時代の切実な要求以外に、基本的な人間形成という問題があるのではないか。そういうふうな問題も大きな目で見れば、産業社会の形成に役立つ教育だというふうにかんがえることができるのじやないか。そういうふうな考え方もかなり強く出たのであります。最初にそんな点が一番問題になつて、近代産業社会に適應した教育体制を作る。そういう考え方で出発しようじやないかというふうにかんがえて発足したのであります。もちろんそのことも、その後のいろいろな現実的な調査によりましてそれが具体化され、或はそれがいろいろ改変されて、ここに総合教育計画というものが出来あがつたわけでありませう。そういう考え方で

出発しますと同時に、もう一方の柱と致しまして、私共は何と申しましようか、現実主義と申しますか、現実の現在の段階、現実の情勢というものに素直に従うという考え方を強くとったのであります。ご承知のように、計画並びにその推進ということは非常に実践的なものでありまして、それだけに机上プランを作ったのでは実際の役に立たないのであります。

大変妙な例であります。具体的に申しますと、例えば富山県の地方鉄道これは大変東京の方々が来られるとのんびりしているのであります。東京の山手線や中央線は何分おきにどんどん電車が走っておりまして駅における停車時間も非常に短い、きわめて迅速なのであります。ところが富山県に参りますと、非常に間隔も空いておりますし、駅における停車時間も長い。そういう場合に、もっと早く迅速に運転しようということは一応考えられるわけですが、しかしその点だけで東京と同じようにこの富山県の鉄道を早く運転してみても、果たして富山県の現実の状態にあった交通機関の整備になるかと申しますと、そこにはいろいろ問題が起こってくる。例えて申しますと、富山県の鉄道は何故おそいかと申しますと、客車と荷物の電車が同じであります。荷物がお客さんの処にのつかっていて、荷物のあげおろしをしている。それを切り離して荷物は荷物列車として、客車は客車として運転するということになりまして、時間はなるほど早くなりましようが、全体のエネルギーを考えると非常に少ない荷物を運ぶために電車を動かさなければならぬ。お客さんが乗らないのに電車を動かすということになると、全体の生活の構造にはバランスがとれなくなる。それは結局非常な電力を消費し、人力を使ってスピードという点は一応実現し得たとしても、実際の生活構造にあつていないから、その割に能力を発揮していないという状態になるのではないか。こういったように何と申しますか、時代のもっている教育もそれぞれその時代の現実の大勢にマッチしていなければならぬ。ただむやみにこの点だけを強調してそれを拡充してみたところで、全体としては非常に片チャンバなものになるというこ

とが考えられると思います。

そういう点で現実の情勢を素直に考える。それに素直に沿ってゆく。そしてその中から徐々に、いわば内面的エネルギーが自然に転化して、次から次へと次の発展段階に到達するという考え方で基本計画が考えられるのではないか。非常に抽象的な言葉になりましたが、こんなふうに見えるのであります。このことはしかし実際に私共が現実を調べて計画をたてていきます際に、いつも非常に大きな指標になったわけでありまして、頭の中で考える我々の理想は、理念は、いつも先の方へ走るのであります。それが現実を考えると、態度でもっていつも修正され、出来るだけ実践可能な計画という所へ引きずられてきた。そして今、皆さんにお目にかかるような教育計画が出来あがつたわけでありまして。

そのような考え方で教育全体の問題を取り扱ったのであります。そしてまた、ここに総合教育計画が出来あがつたのであります。これも結局、私は現実のこの富山県のもっている現実の所産と申すのであります。よから御覧になりますと、例えばもつと具体的な計画が可能なんじゃないか。例えて申しますと、この中にカリキュラムについての具体的な計画というものとはほとんどございませぬ。ただその方向が指示してあるだけで、高等学校にしても、あるいは小学校、あるいは幼稚園の教育にしましても、ごく初歩的なものと基本的なものが書いてあるだけで、いわばこれからその実践をする端緒となるようなものがここに計画としてあがつております。そのことは私は今、これをふりかえってみまして、やはりこの富山県の現実の姿がかくの如きものを生みだしたのではないか。例えば、なるほど頭の中ではこの計画の基本的な考え方は出ておりますが、高等学校における職業教育、産業教育といえますか、そういうものをもつと普通教育と結びつけて、いわゆるジェネラル・エジュケーションというものをつくりあげて、そういうカリキュラムを作る。職業教育を受けながらそこにおいて一般的な教養を獲得してゆくような新しい近代社会の教育内容を確立してゆく

というようなことがいわれておりますが、何故その實際を計画としてあげなかつたかと申しますとその実際の計画をあげるためにはおそらく私の考えでは今後十年なり十五年なり、かかるのではないかと思えます。現下においてはそういうふうなことについてそういう考え方で第一歩をふみだす、そして今年度からその第一歩を踏み出していくわけでありますが、それが今の段階であると、そういうふうな現実分析をしてきたわけであり

ます。

そんなふうな考えますと、今ここにあるものがそういう現実の段階のいわば象徴といつてもいいのでないか。これを通じて私は第一次の十カ年計画、そしてこれから第二次、第三次と教育の発展計画をやっていく。その最初のごくあらましの設計図を画いてみたものということができるのであります。教育の全体にわたって産業社会に適応せしめるという点を、幼稚園から社会教育に至るまで、あるいは特殊教育とかそのすべてにわたって全体の設計図を画いてみたものです。そういう線の上において、我々はこの具体的問題を段々やってゆく、そういうふうなものとしてこれが成立したということは、この県の状態がまさにそういうものを現に要求しているからだというふうには私は考えるのであります。

もちろんもつと具体的に産業の面だけに限って、例えば高等学校の切実な面も精細に計画してその具体的な計画をたてることも可能だと思っておりますが、それは計画として可能であつて、果たして全体の富山県の教育というものを調和的な発展の上に作りあげ、すべての人々の満足のゆく形において展開していくという点から考えてみるとどうであるかというふうにも考えられるのであります。そういうような、ある意味では非常に現実主義といえますか、理想がないとお考えになる方もあるかとも思いますがそういう考え方をとつたのであります。とくに計画となりますと、これは経済的なあるいは財政的な基礎を伴うものであります。すべての人々の納得がなくてはなりたないものであります。それが財政という形で、

現実に教育計画の實施を規定していくわけであります。そういうものもこの教育計画を作る上に非常に大きな要因になつたと私は思うのであります。

今申しあげたことは非常に一般的な考え方でありますが、そういう一般的な考え方の上に立つて、私共はその教育計画というものを作りあげていったわけであります。もちろん計画のそういう態度は、誰が計画するかということによつても大いに変わってくると思うのです。どういう組織でどういう体制で作つたか、どういう人々によつて作られたか、どういう社会的勢力によつて作られたかということもこの計画を規定する大きな要因だと思います。私共はこれは先ほど来、成田さんも申されたように、県の総合開発審議会において県がやる仕事として、その道の専門家によつて作られたのであります。もつと外のいろんな社会的勢力ということも考えられないわけではないのであります。これに参与しなかつた社会的勢力というものは非常に沢山あるわけでありまして、そういう人達も参与すればまた違った形になるのであります。それは結局すべての勢力というものを結集して仕事をすることが現在の社会において必ずしも可能でない。さまざまな人がさまざまな計画をたてる方がむしろよいのでないか。あるいは、県は県としてこういう計画をたてる。また別の考えの人が別の計画をたてる。その間に自ら真実のものが生まれてくるのでないか、こういうように私共は考えるのであります。現在、文部省あるいは中央産業教育審議会で考えられておりますのも客観的にみて、それは一つの社会的な勢力というふうな考えられるのであります。また外にいろいろ別の考え方に立っている人が産業教育計画というものをやつていかれることも可能だと思つたのでありますけれども、今この総合教育計画に関する限りは先ほど申しましたような態勢のもとにおいてすべて作られたものであることもあわせてお考えになつてもらいたいと思つたのであります。

計画樹立の手続き

次に実際にこの計画をたてます手続きについて申しあげたいと思いません。先ほど申しましたように、現実の情勢に従う、そういう考え方で私共は二つの現実、二つの面から現実を問題にしたのであります。一つは申すまでもなく教育の現実であります。一つは産業社会の現実であります。それぞれに対して手続きとしましては調査から入ったわけでありました。産業社会の現実というものは、先程来、成田さんがお話になりましたように、各専門分科会がそれぞれ精細な企画のもとに調査を実施されたわけでありました。例えて申しますと、畜産というものを導入して富山県の農業形態というものを変革していくというふうなことは、富山県の畜産状況を精細に調査された上でたてられた企画であります。そのことがそういう生活の内容と申しますか、段階というものが教育に対して何を要求してくるかということを考えるのが産業社会に対するわれわれの調査である。そういうふうには私共は考えたのであります。

畜産が例えば今後十年間においてかくの如き段階になると考えますと、それは人間の畜産計画に関する限りは農業の計画であります。教育の場合には人間がそういう生活の中に入り込んだ生活をしておる。従って人間の技術的な行動といえますか、そういうものも今とは非常に違った構造になるわけでありまして。あるいは経済に対する考え方というものをもって生活するような―それがわれわれに対してかくの如き教育を行えとの要求を出してくる。こういうふうには考えられるのじゃないかと思えます。それは教育の内容であります。そういう教育の内容目標をきめて参りますと、そういう人間を作るにはかくの如き学校の施設を必要とするという要求もまた次に出てくると思うのであります。そういう施設においてそういう教育内容をするということになれば、教員もまた畜産を導入した生活とい

うものについての相当の理解をもち、それに対する指導ができるような教育者、指導者でなければならぬということになってくる。こういったような一つの畜産計画、あるいは畜産の現状というものが明らかになって参りますと、それが教育に対していろいろな要求を出してくる。その要求と申しますのは、もちろん私共がそれを教育的な面から解釈したのです。なるほど一応畜産の方々も畜産が必要になってくるから畜産の教育をやれというふうな要求を出しますが、それではまだ真の産業社会の教育に対する要求とはいえない。私共は教育的な見地からもう一遍解釈し直す翻訳する。人間の生活の姿、人間の問題として翻訳してそこに初めてそれを教育の要求としてとらえることができるのだというふうには考えないのであります。

これは一例であります。先程も成田さんが申されましたように、例えば富山県は冷水浅耕土地帯が非常に多いわけでありまして。そういう地帯における教育とそうでない肥沃地帯、湿地地帯における教育とはまた違った教育でなければならぬ。その本質においては同じものを持っておりましようけれども、実際の学校施設あるいは教育内容というような点については違ったものが必要になってくるわけでありまして。そういうことも私共はこれを教育に対する要求として取り入れなければならぬと思うのであります。

あるいは先程やはり成田さんが申されました人口雇用計画というようなものがあります。十年後には凡そ百万の人口ができる。それが凡そどういような形で商業、工業、あるいは農業に吸収されていくかということについての精細な計画があるわけでありまして。現状を調べても富山県の農村地帯からはかなり多くの工業生活に入っていく者が出るわけでありまして、中学校の卒業者を調べてもある地方になると三〇％から工業、商業に入っていく。そういう地帯があるのであります。更に人口雇用計画、それぞれの地域における人間の生活状態、雇用の計画というものは教育の側からみると、生活の類型というものを規定していくことだと考えられま

すが、そういうことを規定してきているわけでありませう。そうしますと、それぞれの地域における教育機関の種別に致しましてもわれわれはそういう土地に住む人間の生活のあり方というものを考えて、それぞれ特殊な教育機関を設けていかなければならぬと思うのであります。ただ農村だから農村の学校としておけばよいのでなくて、そういう農村は農村として農村の特殊な一つの類型としてそこにおける教育は工業の教育も行うような機関でなければならぬ。そういう種別分布、種別あるいはその分布というものに対する要求も産業社会の実態が出てくるわけでありませう。そういう実態、あるいはその計画の内容をできるだけ詳しく調べ、これを教育的に翻訳致しまして、教育の部門にそれぞれ位置づけるといふ仕事をしなければならぬ。それが一つの大きな仕事であったわけでありませう。

その具体的な内容については、文部省の調査課から出ております『教育調査』という雑誌にも書いておきましたし、文部省から出ました『職業教育及び職業指導』という本にも書いておきましたから御覧になって頂きたいと思ひます。今日は時間がないのでその点は省略致しますが、まとめて申しますと、結局産業社会の要求というものを四つの点、すなわち学校の種別ないし分布に対してどのような要求を産業社会の計画が出してくるか。内容方法に対してどのような要求を出してくるか。施設に対してどのような要求を出してくるか。ややそれとは違っているわけでありませうが更に教員、指導者というものに対してどのような要求を出してくるか。この四つの点から各専門分科会がおやりになつたいろいろの調査ならびに計画を分析したわけでありませう。そうしてそれを現在の教育の現実というものを批判する眼鏡に使つたわけでありませう。いわば現在の教育を分析するスコープとして使つたのです。

次に現在の教育もまた同じ眼鏡で幼児教育から社会教育に至るまで、種別分布が産業の要求に合致しておるかどうかどうか。この産業の要求と申

しますのは、それぞれ各専門分科会がたてている実態ならびに計画、そういう要求に合致しているかどうか。内容方法はマッチしているかどうか。施設設備の面ではマッチしているかどうか。教職員の点ではマッチしているかどうか、というふうに分析して行つたわけでありませう。

そこでその二つを大きな表に作りまして、産業の要求と申しますか、そういう産業を分析したものを上に書く。こちら側に（手で指し示して）各教育段階、幼稚園教育、幼児教育から初等教育、中等教育、その段階が種別、内容、方法をずっとあげましてそれぞれについてそういう要求を全面的に浸透させるといふ点から全部検討していくわけでありませう。考え方としてはそういう縦の線に産業の要求を出し、横の線に現在の学校の状態を出し、それによつて一つ一つ全部検討した。すなわち幼稚園から産業の要求というものを生かして行こう。幼稚園の種別分布というものに対して、産業は何を要求しているか。そして現実の幼稚園の分布は果たしてそれにマッチしているかどうか。その内容方法は、産業の要求に対してマッチしているかどうか、というふうに全面的に検討して行つたわけでありませう。

この場合に私共が考えましたのは、産業教育というものについての一般の考え方と多少違ふかもしれないと思ひます。ただ中学校や高等学校の職業科の教育とは考えなかつたのであります。幼稚園の時代に手を使うことを訓練する。物を工作する。そういうふうな仕事の中にも産業人を育成する大きな要素がある。そういう点から幼稚園の教育も考えていかなければならぬ。

幼稚園はただ子供を遊ばせて、子供にしつけを与え、歌をうたわせておくだけでよいのでなく、近代産業人を作り、あるいは近代社会の人間を作るのだというふうに考えるのであります。小学校においても同様でありませう。もちろん小学校を卒業したすべての人が産業人として、いわゆる狭い意味の産業社会へ入つていくわけではないのであります。しかしながら私共はその点についても近代の産業社会の中に住む人間は直接いわゆ

る狭義の産業にたずさわられない方々でも、産業に対する少なくとも基本的センスを持たなければならぬ。私共の中等学校時代の教育というものは、そういう事柄からは全然とざされておりました、私が今になってそういう産業の実情というものにほとんど低能に近い状態であるということ、私が今悔んでも悔みきれないものを持っています。

私は今教育の事をいろいろ研究する人間でありますけれども、産業社会のそういう機構の中に住む歴大な生産組織の中に、あるいは農村のいろいろな作物を取り扱うそういう生活、そういう人々の教育を考える上にかかると非常に悔んでいるのであります。しかし今の日本の全体の状況を見ますと、例えば歴大な官僚人というものは産業に対して、産業社会に対してそういったセンスをどれだけ持っておりますか。非常にダイナミックな産業社会の基本的性格を、本当に自分の肉体として感じておられる方がどれだけあるか。むしろ中学校、高等学校、大学を通じて非常に抽象的な教育をうけたため、ただ知識のうえであるいは数字の上でのみ、ものを考えるという、こういう傾向がないだろうか。そういうように私は考えるのであります。そんなふうな考え方から幼稚園、初等教育においても産業教育といえますか、産業性というものの、少なくとも芽を出している一番基本的なものをその頃から積みあげていくという見地から教育の全体を検討したわけでありませう。

現 状 分 析

その検討、現状分析といえますか、これについて次にごく簡単に申しあげます。

(一) 一番初めは幼児教育であります。幼児教育の中心問題はほとんど幼児に対する教育、合理的な、組織的な教育というものがなされておら

んとということに問題があると思っております。世界の趨勢を眺めてみましても、幼児に対する近代的教育は殆ど一般的になっておりました、あたりまえのことになっております。しかし富山県においてはいづれくわしい表、報告書をごらんいただきたいと思っておりますが、極めて貧困でありまして、幼児教育機関は七十七という少ない数であります。ここに一つ幼児教育に対する根本問題がある。これは直接産業性に関係がないかの如くであります。子供の頃から近代社会というものに触れさせるように、そういう機関の中に入れて考えていくのと、全然そうでなく、家庭の中に放置されているのでは随分違う、まずその辺から産業教育という問題があるのではないか。むしろ近代日本人に対する形成という点から考えて、その辺にすでに大きな問題があるのではないかと、ふうに考えられるわけでありませう。実際に幼児教育機関の中に入ってあります教育の内容は、そういった考え方からは作りあげられておらないのでありまして、きわめて一般的にいわば家庭生活の延長という程度にしか考えられていないのであります。家庭でお母さんがみるかわりに幼稚園の先生が、あるいは保育所の保母さんがみてやる程度であります。その中にも近代産業社会の基本的なものを入れ込んで、そこにおいて子供の頃からそういうセンスを養うということは決して不可能ではないのであります。そういう点に大きな問題があることが明らかになってきたのであります。

(二) 初等教育に対しましては、そういう普及の問題はないのであります。教育の内容、方法の点からみましてこれは非常に大きな問題をもっている。御承知のように初等教育は、最近五ヶ年間はカリキュラムの問題で狂奔して参りました。社会科を中心とする教育課程の構成が非常に大きな問題でありました。社会の現実ということの問題にすることが問題になっておったのであります。その全体の内容を見ますと、社会のいわば産業と対照的位置にある消費生活の現実というものが非常に多くと

りあげられている。非常に消費的な人間の教育であるという感じがあるの
であります。これはただ感じてではなくて、いろいろ内容を分析するとそう
いうことが明らかになってくるのであります。小学校で教えられる社会科
学(社会科)自然科学(理科)に対しまして、図画工作に対しまして、
きわめて消費的であります。それらのものはおそらく近代社会においては、
生活の中から積みあげられてきたと思うのであります。ところがそういう
本質的な基盤が忘れられて、そういう色彩の薄い消費的なものになってい
る。それを根本的に変えなければならぬ。ここに問題があると思うので
あります。

その事と対応して、小学校における施設の問題は非常に重要だと思いの
であります。自然科学(理科)の教育に対しまして、生産と結びついた教
育が成り立つためには、現実の材料を使って実験をし、そして教育を積み
上げていかなければならぬのであります。消費者的教育の生活にわざわ
いされて知識教育に随っているのであります。現在の小学校教育は、富山
県においては例えば理科の実験室を持つものは約半数、しかも非常にそれ
は産業性という見地から内容をみるときわめて貧困であります。工作に至
っては二、三%の学校にしか施設をもっていない。その内容にしても粗
末な極端に言えば玩具にすぎないのであります。何も子供がむつかしい機
械にぶつかって仕事をしなければならぬというのではないのでして、子供
の頃から近代社会の持っている機械技術の中に入ってそういうセンスを
養うということは、小学校において絶対に必要でないかと思われるのであ
ります。ところがそういう点についてほとんど富山県においては要求がみ
たされておらぬということが明らかになってきたのであります。そこに基
本的問題がある。いわば小学校教育を子供の環境としてみた場合はきわめ
て非生産的である。

これらの点については先程申しあげたように、教育に対する根本的な先
生方の考え方もあると思うのであります。産業に対する教育は何か職業人

の教育、徒弟の教育というような考え方であつて、それが本質的な近代社
会の教育なんだという考え方がない。教育というものは、もつと何か非現
実的な抽象的な崇高なものであつて一般的なものでないという考え方が
あるのじゃないかと思ひます。それは現在の教育者がそういう教育を従来
受けてきたということによるので、ここに教員の再教育と申しますか、産
業教育に対するセンス、教育の産業性に対するセンスを養う政策が行われ
なければこの問題は解決しないのではないかと思ひます。そうい
つたことが小学校の問題であります。

(三) 次に中学校であります。中学校は戦後出来上つた新しい大衆の
教育機関として三年のいわゆる六・三・三の中間の段階であります。これ
は富山県においては外枠だけはかなり立派なものが出来ているのであり
ます。これは富山県が組合立の学校が非常に多いのであります。その点か
ら経済的基盤に恵まれて相当すぐれた学校があるのであります。しかしそ
れは外枠だけでありまして、中には小学校以上に貧困であつて農業に関す
る実習地を持つている学校はほとんどないといつてもよい現状でありま
す。中学校は戦後新しく出来、非常に大変な経費をかけて出来た学校であ
りますから当然のことではありますが、その点から中学校は小学校と同様に
あるいはそれ以上にもつともつと教育内容、方法、設備の点で根本的な問
題をもつていると思ひます。

中学校の卒業者という者の大体六十%が直接産業に入つていく。残りの
者といえども高等学校を出て、また産業界に入つていくものであります。
その他の大学へ進む者といえども結局はこの産業界の問題を色々考え、
それを処理する人間になつていくわけであります。そういう者が全然産業
に関するものを準備していない中学校を出ていくということは非常に大
きな問題であると考えられるわけであります。そのくわしい表も後程総合
教育計画書をご覧になつてよくおわかりのことと思ひますのであります。今

日はそれを省略しておきます。

(四) 次に高等学校の教育であります。これはなかなか複雑な問題を持つてゐるわけであり。まず第一に高等学校の教育と申しますと、現在高等学校に在学するだけの者が考えられるのでありますが、同じ年齢の青少年で中学校を出て勤労生活に入った者が一方において教育を受けないうで放置されているという事実があるのであります。それぞれその段階の教育としてわれわれは同時に考えなければならぬのではないかと。高等学校へ入った者の教育は現に高等学校でやっておりますが、その他の者はほとんどこれは放置されている。そのごく少数が定時制の高等学校、それからさらにもっと少数が青年学級というような所で教育を受けておりまして、大部分はそういうものからしめ出されて全然放置されてあります。その段階の教育というものを我々は根本的に考えなければならぬ。それはただ産業の技術、その人達によつて産業の能率が上がるというばかりでなく、この現在の複雑な産業社会、それを基盤にしたさまざまな上部構造をもつ社会の人間として、中学校の教育だけではどうしても足りないものがあるという点が考えられるわけであり。ます。

そのうち、まず高等学校の教育であります。現在の高等学校は総合高等学校の考え方がとられてゐるわけであり。これは理念としてはきわめてすぐれた考え方でありまして、人間の教育としては職業的な教養も一般教養も同じ教養である。同じ価値をもつてゐるのだという点から、総合制というものは理念としてはすぐれたものであります。実際にこれが運営される形をみますと、そのために職業的な教養と申しますか、そちらの方が圧迫されておるといふ現状にあるのであります。これは現在の日本人が持つてゐる教育に対する考え方が結局それを生み出してきてゐるのだと思ひます。

富山県におきましても職業課程と普通課程と一体どちらが人気がある

かと申しますと、普通課程が人気があるのであります。中学校に入る時にも出る時にも、生徒には普通課程が人気がある。これは教育に対する基本的な考え方によると思ふのです。同時にまた一面においては、教育の実体がそうであると考えられるのであります。富山県ばかりではありませぬけれども、外の県の状況をみましても職業的な教養、そちらの方に重点をおいた教育の内容方法施設というものは極めて貧困なのであります。

有数の工業学校にしましても、あるいは農業学校に致しましても、ほとんどそのレベルというものは近代の社会、産業社会がもつておりますレベルより約半世紀も遅れている。そこにある施設設備をみると、五、六十年前のものが相当沢山ある。それはただ博物館の役割をしてゐるにすぎないという状況が実際にある。そういうところで教育されてきた卒業生が、近代社会にもてないのも当然であります。その上一般的教育が本當の教育であるという考え方があれば、職業課程が人気がないのは当然でないかと思ひます。

われわれの考え方から致しまして、どうしても近代産業社会の人間というものは近代産業機構の中にあつて、そういうセンスをもつ、そういうダイナミックな世界において教育されてきた人間でなければならぬと考えるわけであり。ますからそういう施設設備を充実し、そこにおける内容を方法を充実して、それこそ基本的な人間の教育なんだということを實現する必要がある。ここにはわれわれの全エネルギーを注いでやらなければならぬ問題があるのでないかと考えたわけであり。ます。

ただ職業というような、職業の技術を抜き出して、それに対する徒弟的な教育をするというのではなく、これは内容の問題であります。施設設備に対してもただその機械の使い方を覚えるという技能の訓練をするものとしてでなく、近代の教育がよつてもつて立つ所の基盤として、環境として、すぐれた近代産業体制というものが学校の中に入つて来ていなければならぬ。その中で教育内容も産業に関するものを中核としながら、そ

ういうことを通じて一般的な教育、教養も与えられなければならない。産業の中で生活するということをもって具体的に道徳教育にしても、情操教育にしても言ってみればそういう一般的な教養、あるいは言葉の教養、あるいは数学、こういったものが産業の基盤の上にそれを中核としてなりたなければならないということ、高等学校の教育においては考えるわけであり、このために高等学校は飛躍的な施設設備を基盤にして充実計画をたてなければならぬわけであり、

この点から計画と致しましては、富山県については特に産業教育のためのサービスセンターという一応仮称の名前を考えたのでありますが、ダイナミックな生活の場として産業的な環境を作り、産業社会の縮図というものを作ってその中において生徒を生活させるというサービスセンターというものを考えたわけであり、全県を十か十二、三の地区に分けてそれぞれに相当完備した産業社会の縮図というものを作りまして、農業工業、商業という面においてそこで生活し、そして産業社会の実体に触れる。さらにいろいろな技量の訓練をする。研究もするというところを行えるような施設を作る。これは産業に関する施設を各学校に分散しないで集約的に高度なものを作る。高度というのはいたずらに程度の高いということではなく、本県産業の問題とするものを根本的に解決できるものを集約的に作るという意味で、それによつて産業社会に直接触れしめる方法を講じたならどうかということを考えてわけであり、学校のそれぞれに、各家庭のそれぞれに予算を分配しているというふうなことでは、到底これは飛躍的な産業体制に即応していくことができないのではないかと私共は考えたわけであり、

次に定時制の高等学校及びその背後にあります勤労青少年の教育であります、これは今の教育方式でとらえることは全然不可能であるといつて良いと思います。勤労青少年として実際に産業企業体の中にある子供を引き出して、これを学校で教育するということは不可能であると考えら

れるのであります。むしろ企業体の中に企業体自らがそういう青少年を教育する施設、設備、組織を持つべきである。そういうことについての努力を今後十ヶ年間にわたって続けていきたいと私共は考えたわけであり、企業体については中小企業体もあり、大きな企業体もある。例えばこの県では不二越という企業体、これは大きな工場であります、それは定時制の高等学校を実際もつていますが、そういうものを小さな企業体は、小さい企業体なりに連合して、その企業体内の青年をとらえてこれを教育するという方式をたてていくべきでないか。その場合に現在持っている定時制高等学校というような方式を強要すると、実際のそういう企業体が組織をもつことが不可能になると思うのであります。この点はきわめて重要で、今考えられておりますような青年学級というふうなものでも、発端として今後十年間に自由に諸種の企業体の中に教育のあり方というものを研究しつつ、実際にそれを太らせていくべきでないか、このように考えるわけであり、そういうものを今後十年間において太らせていきたい。産業社会に入ることは、そのまま人間の教養を高めていくゆえんになるという考え方を新しい産業機構の中において作りあげていきたいと考えるわけであり、具体的に農業、工業、商業というふうにしあげるといいのであります、時間がないので一般的な考え方として具体的に計画をしたということだけを申しあげておきます。

(五) もう一つ社会教育が残っているわけであり、社会教育におきましては、現在これは非常に範囲の広い問題であります。一方において各種の社会教育団体、青年団体とか、婦人団体等がありましてそれぞれ活動している。一方教育の行政当局の方で色々な講習会も行われています。あるいはまた、公民館というものもある。図書館というものもある。様々なものがあるわけであり、これらのものがそれぞれほとんど何の関連もなく動いているのが現在の状況であると思うのでありますが、こういうも

のがもちろんそれぞれの特色を發揮していいのでありますが、相互に統一をもつて行動するということが必要なんじゃないかということであります。こういう点から私共は公民館を中心とする所の社会教育の体制整備ということを考えてわけであります。

現在、富山県では公民館の設けられているのは非常に少ない。特に建物をもっているものは非常に少ないのでありますが、やはり公民館は建物をもつて施設設備をもつてそれぞれの地域の産業の実態を研究する。そういうふうなことに對してサービス設備をもつという役目を一つ持たなければならぬ。更にその上に、公民館には社会の人々に対する指導者がおられて、青年団体、婦人団体等に対する団体活動——これは団体活動を通じて、それらの人々が自己教育する一つの教育方式だと思ふのでありますが——そういうものの団体活動の相談相手になってやる。それに刺戟を与える、そういうサービスをする役目を持たなければならぬ。

それにもう一つ公民館には一般のいわゆる群衆としてとらえられる人々と申しますか、団体活動にも入らない人、その人達がたまたまそこに来て、公民館の行事なら行事、あるいは公民館の行く講座等に来て、そこから色々な教養を得ていくような活動、いわゆる地域の人の教養に資するようなサービス活動、この三つの機能を公民館に持たせる。そして図書とか、あるいは視聴覚教材というものを皆その機能にあわせて公民館に集約する。その上に地方のそれぞれの地域の村の公民館の、もう一つ上の単位と致しまして全県を十か十幾つかの地域に分割し、特色を考えて中央公民館という大きな施設を考える。これは先程申しました教育のサービス・センターと丁度マッチすると思うのでありますが、そういう大きなサービス・センター的な公民館というものを設ける。それによつて全体の社会教育の統合を図る、こういうことを通じて産業教育といえますか、産業社会に現に働いておられる人々の産業的な教養といえますか、それを中核とした様々な生活の問題に對する教養を高めていく。こういうような施

設を置いて社会教育を統合していったらどうか、というふうに考えていたわけでありませう。

今後の課題

以上のようなことを大体の設計図としてここに富山県総合開発計画の一環としての教育計画が出来上がっているわけでありませうが、これは先程申しましたように県のそれぞれの専門家が作りになった設計図であります。これを実践を通じて今年からその色々な部面を通じて実践に入っているのですが、そういう実践を通じてあるいは一般の教員の方々、あるいはPTAの方々あるいは一般市民の方々がこれに関心をもつて、そして具体的な実践計画を次々と部分部分でおさえていき、そしてそれを実践することを通じてまたその次の実践計画を作る、というふうになるぐるまわりながら、次第に展開していったらどうかと私共は考えているわけでありませう。従つて今後の課題はこれを県全体の教育界、あるいは一般社会にいかにして普及し、そしてそれらの人々の意見によつて、いかにしてこれを拡充し改善していくかという問題が大きな問題として残されていると私は考えているのであります。大変早口で色々なことを申しあげたのであります、私の話はこれをもつて終わることに致します。